



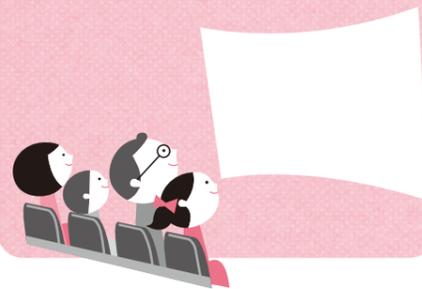
情報ライブラリーだより

テーマ/女性の政治参画

毎月第三日曜開催!! 子どもたちのための上映会

3月17日(日)『桃色のクレヨン』他
上映時間 9:45~11:00
14:00~15:00

会場:パレア9階情報ライブラリー内
*都合により上映作品を変更することがあります



パレア9階情報ライブラリーでは、男女共同参画、生涯学習、NPOに関する図書などの貸し出しを行っています。ぜひ気軽にお立ち寄りください。

女は「政治」に向かないの?

秋山 訓子(著)
講談社 出版



野田聖子、小池百合子、山尾志桜里など、7人の女性政治家たちは、どんな思いで政治を志し、どんな経験をしてきたのか、これまでの歩みと男性社会で生き抜くための秘策を語ります。

女政治家の通信簿

古谷 経衡(著)
小学館 出版



活躍するためには「女性だから」と重宝するのではなく、「政治家の資質」を問うことが必要。女性政治家29人の政策力・政治経験・選挙力などを筆者が独自に採点し論じた一冊です。

男女共同参画 in パレア マインドアップセミナー2

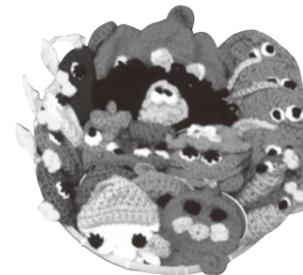
転んだら 何かをつかんで 立ち上がれ!

～東北の暮らしの知恵を復興ビジネスへ～

東日本大震災以降、復興支援に取り組む足立千佳子さんを講師に迎え、セミナー「転んだら何かをつかんで立ち上がれ!～東北の暮らしの知恵を復興ビジネスへ～」を11月17日(土)、くまもと県民交流館パレアで行いました。県内外から50人の参加者が集まり、東日本大震災後の支援活動の様子や現在の取り組みについて、熱心に耳を傾けました。

東日本大震災以前からまちづくりに関わっている足立千佳子さん。現在も、宮城県の「おへそ」仙台市から北に70kmほど離れた登米市で、「とめ女性支援センター」(運営特定非営利活動法人とめタウンネット)のセンター長を務めるなど、女性がイキイキと

浜のお母ちゃんの 経済活動を支援



「編んだもんだら」のエコタワシ。中には、実物を持ってきて、それをモデルに編んだものもあるそうです



講師 足立 千佳子さん

(特定非営利活動法人とめタウンネットプロジェクトリーダー) 仙台市出身。東日本大震災後、登米の被災地支援活動「さざほざ」プロジェクトを担当。被災支援グッズの作成「編んだもんだら」や、農村と都市をつなぐコミュニティカフェ「うれしや」をプロデュース。

グループに分かれ、熊本地震の際、何をしていたかをそれぞれ振り返りました



活躍する地域づくりに取り組んでいます。震災後、南三陸や気仙沼など、津波被害のあった沿岸地域の避難所を訪れた足立さん。特に気になったのが、これまで自宅の畑仕事や、夫の漁業の手伝いなどをしてきた、元気な高齢女性の「仕事」がなくなってしまうこと。そこで「お母ちゃんたちの身の丈にあった手仕事を通して、経済活動を手助けしたい」と、「編んだもんだら」というプロジェクトを立ち上げました。エコタワシを作り、インターネットなどを通して全国で販売する取り組みです。沿岸地域に生まれ育ち、子どものころから海と慣れ親しんできた女性たちには、商品開発から関わってもらい、タコやサシなど、地元の海産物を模したエコタワシを一つひとつみんで編み上げていきました。1個540円のエコタワシは、材料費などを除いた金額が、編んだ人の収入になります。

「売上げを貯めて、孫たちにお寿司をごちそうするんだ」という笑顔を見て、自分自身で稼ぐことが、お母ちゃんたちを元気づけ、復興・再生へつながっていく力になると実感しました」と足立さんは話します。

お互いの強みを生かし 転んでも前向きに

後半のワークショップでは、グループごとに、講座での気付きについて話し合い、用紙にまとめていきました。書き出されたのは、「お互いの強みを生かして、連携したビジネスをしていきたい」「情報弱者がいること、埋もれた小さな問題がたくさんあることを忘れない!!」など。熊本の復興に向けて語る参加者の皆さんのイキイキとした表情が印象的でした。



「四賢婦人物語」に学ぶ

～時代を切り開いた矢嶋姉妹 その②

文・齊藤 輝代

夫婦は精神的交際をすべし 女性の自覚を訴えた徳富蘇峰

共働きの娘夫婦と同居している80代友人の言葉です。

「娘は母親のくせに、休日に幼い子を夫に預けて、趣味の講座に出かけて行った。婿も情けない。『僕もこの子の親です。2時間ぐらい僕が面倒見ますから問題ありません』と言った。とんでもない夫婦だ」

古い日本社会の考えで生きてきた友人は自信を持って断言しました。すかさず「素敵なご夫婦ですね」と、若夫婦を援護すると、友人は理解不可能という表情を返してきました。娘婿でなく息子であったら、さらに嫁への非難は大きかったかもしれないと感じた出来事でした。同時に、私も無意識のうちに「〇だからこうあるべき」と子育て時代に言ったかもしれないと反省させられました。現代の若い世代に家事や育児に積極的な男性が増えてきているのはうれしいことです。

さて、矢嶋家四女久子の長男、徳富蘇峰(そほう)は明治20年に総合維



さいとうてるよ 益城町在住。平成26年度「熊本県民芸賞」一席受賞。同27年「短編小説集百年の綿菓子」出版。同28年「第1回安川電機九州文学賞」大賞受賞。

誌「国民之友」を創刊し、「日本の婦人論」を掲載しました。日本女性の能力を高く評価し、女性自身の自覚を訴えています。「婦人のほほ笑みや涙は平和の源なり」夫婦は精神的交際をすべし。婦人が自由でなければ精神の修養は遂げられない」と述べています。130年前の青年蘇峰の考えは現代でも十分訴える力を持っています。日本社会の男女平等の現実、明治からどれほど成長してきたでしょうか。

前述の友人の娘さんは現在、夫の故郷であるアメリカに移り住み、共働きを続けながら一男一女を育てているということです。



今年4月、益城町杉堂に「四賢婦人記念館」がオープンします! 詳しくは益城町HPへ(完成図提供:益城町教育委員会) <https://www.town.mashiki.lg.jp/>

※四賢婦人とは、幕末の頃、益城町の矢嶋家に誕生した竹崎順子(たけざき じゅんこ)、徳富久子(とくとみ ひさこ)、横井(よこい)つせ子、矢嶋楯子(やじま かじこ)の四姉妹。自ら行動を起こし、男女平等社会の礎を築くために尽力した人物です。